在外研究員滞在記

バンコク家族滞在記

東京理科大学 創域理工学部 情報計算科学科　講師
大村（おおむら）　英史（ひでふみ）

滞 在 地：タイ　バンコク
在 外 先：タイ国立電子コンピューター技術研究センター
（National Electronics and Computer Technology Center）
滞在期間：2024年4月1日～2024年9月30日

■地震の少ないバンコクが…

2025年3月28日、ミャンマーで大きな地震が発生しました。私が昨年度滞在していたバンコクでも大きな揺れがあり、多くの被害が出たようです。バンコクは地震が極めて少ない地域として知られており、そのため東京以上に高層ビルが立ち並んでいます。そんなバンコクで大きな地震が発生したことは、非常に驚きでした。現地で知り合った方々に当時の様子を伺うと、交通機関はすべて停止し、多くの人が徒歩で長時間かけて帰宅したそうです。ビルの多くにはひびが入り、今もなお余震への不安を抱えているとのことでした。その話を聞いて、私は東日本大震災の際の東京の光景を思い出しました。私は2024年4月1日からバンコクに滞在していましたが、その直後の4月3日には台湾で大地震がありました。もし滞在先を台湾にしていたら…と想像したものですが、まさか1年後に自分がいるバンコクで同じような状況が起きるとは夢にも思いませんでした。また、日本でも昨年初めに北陸で大きな地震がありました。都内でも揺れを感じたことを覚えています。

地震は、「起こりやすい地域」「起こりにくい地域」といった区別に関係なく、突然私たちに襲いかかる災害なのだと、改めて痛感しました。日頃からの備えの大切さを、今一度意識していこうと思います。そして、被災された地域の一日も早い復興を、心よりお祈り申し上げます。

バンコクの高層ビル群

■共同研究を目的に

今回は、東京理科大学の在外研究員制度を利用し、タイのNECTEC（National Electronics and Computer Technology Center）に半年間所属しました。本制度を通じて、NECTECに所属するWinai Chonnaparamutt博士との共同研究を進めることが、大きな目的でした。彼とは、私が博士号を取得した頃に参加した国際会議で出会いました。その後、お互いに訪問し合ったり、オンラインミーティングを通じて研究に関する議論を重ねてきました。「いつか、じっくりと腰を据え

て共同研究を行いたい」と話していたその想いが、このたびようやく実現しました。半年間、同じ職場の同僚として共に働くことができたため、必要なときにはすぐに声をかけ、対面でミーティングを行うことができました。コロナ禍以降、オンラインでの会議や授業が当たり前になりましたが、改めて対面によるコミュニケーションの重要性を実感しました。研究の話にとどまらず、雑談にも多くの時間を費やし、文化・生活様式・宗教観・政治など、タイと日本のさまざまな違いについて語り合いました。こうした情報交換は、これまでの短期出張では得られなかった貴重な経験であり、私にとって大きな刺激となりました。

NECTEC は、タイの国立科学技術開発庁（NSTDA）傘下の研究機関であり、過去に私が在籍していた理化学研究所や国立精神・神経医療研究センターと似た雰囲気を持っています。大学とは異なり、研究者や技術スタッフが主体となる環境で、落ち着いた研究に専念できる場です。NECTEC は、バンコク北部に隣接するパトゥムターニー県のサイエンスパーク内に位置し、周囲には他の研究機関のほか、タマサート大学やアジア工科大学（AIT）などもあります。日本でいえば、筑波研究学園都市やけいはんな学研都市のような地域です。都心からはやや距離があり、通勤にはバスで片道 1 時間以上かかりましたが、幸いバンコク市内にも NSTDA のオフィスがあったため、そちらを拠点に仕事をする機会も多くありました。Chonnaparamutt 先生は、運動を通じて人間の身体に働きかけ、健康を促進するシステムの開発に取り組んできました。一方、私は音楽を通じて人の心に働きかけるシステムの開発を進めてきました。今回の共同研究では、これらのアプローチを融合させ、「心と身体の両面から人間の健康を支援するシステム」の構築を目指しています。半年間の滞在はあっという間に過ぎてしまいましたが、現在もなお、共同研究は継続中です。

■タイの食文化

タイには、街の至るところにたくさんの屋台があります。中には、屋台営業が禁止されている路上でも、調理台を取り付けた改造バイクで営業している屋台までありました。こうした屋台は、安くてとてもおいしいのが魅力です。そのため、日本にいるときに比べて、自炊の回数はぐっと減りました。

日本では「タイ料理＝トムヤムクンのような辛い料理」というイメージが強いですが、辛くない料理もたくさんあります。この点はとても安心でした。とはいえ、うっかり辛い料理だと知らずに注文してしまい、悶絶するほど辛かった…ということも何度かありました。

お米が主食であることは日本とおなじです。タイ米は日本のジャポニカ米とは少し異なりますが、特に気になることはありませんでした。1〜2 週間の出張であればお米を食べなくても問題ありませんが、半年も滞在するとなると、やはりお米が恋しくなります。その点、タイの食文化にはとても助けられました。肉や魚やさまざまな野菜を使う点も日本食と似ています。ご飯とおかずを一緒に食べる食文化は安心します。また、暑い国ならではの特徴として、料理は注文するとその場で焼き直したり、揚げ直したりして提供されることが多いです。そのため、常にできたての料理が楽しめる点は、日本よりも優れていると感じました。

タイは南国であり、さらに雨期であったこともあり果物が非常に豊富でした。マンゴー、バナナ、パイナップルといったおなじみのものはもちろん、マンゴス

NECTECの前にて

スーパーマーケットの果物売り場

チン、ドリアン、ジャックフルーツ、ポメロ、サラ、タマリンドなど、日本ではなかなか食べられない果物もたくさんあります。自宅の冷蔵庫には、いつも色とりどりの果物がぎっしり詰まっていました。中でもドリアンは特にお気に入りで、私にとって特別な存在となりました。日本では「臭い」イメージが先行しがちですが、それ以上に本当においしい果物だと思います。帰国してからは、日本の果物の種類の少なさに少しがっかりしています。

それほどまでに、タイでの食事はどれもおいしく、今でもとても恋しく感じています。

■タイの国際性

タイは言わずと知れた観光立国です。私が滞在を始めた4月には、タイの正月にあたる「ソンクラーン」という祝祭がありました。もともとは仏像や仏塔に水をかけて清める伝統的な宗教行事ですが、現在では、世界中から訪れた観光客が巨大な水鉄砲を手に水を掛け合う一大イベントへと変化しています。私も家族と一緒に観光客としてこのイベントに参加し、大いに楽しみました。当初は「ソンクラーンだから特別なのかな」と思っていましたが、実際には一年を通して常に多くの観光客がタイを訪れています。寺院などの観光地では、タイ人と外国人で二重価格が設定されていることもあります。それだけ外国人の来訪が日常的である証でもあります。バンコクでは、英語が通じる場面が非常に多く、タイ語が分からなくてもそれほど困ることはありません。英語を話せるタイ人も多く、生活において非常に助かりました。

一方、日本でも外国人観光客は増加していますが、英語で対応する店員の多くが外国人スタッフであることが多く、日本人の英語対応力の不足を少し残念に感じています。とはいえ、私自身もタイ語の習得は難しく、残念ながら読めるようにはなりませんでした。挨拶や数字を言える程度にとどまりました。

■タイの国民性

タイの人々はとても穏やかで、日本人とよく似た気質を持っていると感じました。社会の中での上下関係がはっきりしている点なども、日本に近いものがあります。また、子どもやお年寄りにとても優しく、電車では息子に席を譲ってくれる方が本当に多くいました。

見知らぬ子どもに気軽に話しかけるのもごく自然な光景で、屋台のおばちゃんと息子が通りかかるとあいさつする仲になっていたなど、温かい人間関係が感じられました。近年の日本では、ベビーカーへの風当たりが強かったり、「知らない人とは話さないように」と教えられる文化が主流となっているため、真逆のバンコクはまるで昔の日本に戻ったような気持ちになりました。

タイはまだまだ書類中心の社会でもあります。滞在に必要な各種手続きには多くの書類作成が必要で、複数人のサインが必要な書類などは、完成までに時間がかかり大変です。また、労働許可証の申請では「背広を着た証明写真」が必要でした。私はスーツを持参していなかったため困っていたのですが、最終的にはスーツの部分だけ合成で問題ないとのことで、拍子抜けするような一面もありました。厳しいようで、どこか緩い――そんな不思議なバランスを感じました。

また、タイでは入国から90日でビザの更新が必要で、多くの書類が求められました。中でも、妻と息子が私と家族であることを証明するためには日本の戸籍謄本が必要でした。しかもこの書類は自分での翻訳は認められず、日本大使館での公式な翻訳が必要でした。こうした情報はなかなか事前に得られず、移民局と大使館を何度も往復することになり結果的にビザ更新が期限当日になってしまい、危うく不法滞在になるところでした。

タイに限らず、外国で暮らすには想像以上の手間と手続きが必要であり、「外国籍」ということが特別な状態であるという

ソンクラーンでの水の掛け合い

労働許可証の写真

ことを、改めて実感する経験となりました。

■交通事情とキャッシュレス化

バンコクは東京と同様に非常に都会的な都市です。道路には自家用車やバイクだけでなく、タクシー、バイクタクシー、市バス、さらにトゥクトゥクなど、さまざまな交通手段が走っています。これらを大量の人々が利用するため、道路は常に混雑しており、特に通勤時間帯はほとんど動かなくなるほどです。近年では鉄道網の整備が進んでおり、高架鉄道の BTS や地下鉄の MRT が市内を走り、鉄道だけで主要エリアの移動が可能になっています。ただし、通勤ラッシュ時は鉄道もかなり混雑します。それでも、タイの人々は混雑を避ける傾向があり、満員電車には無理に乗らず、次の電車を待つことが一般的です。そのため、東京のような“すし詰め状態”になることはあまりありません。さらに、バンコクでは運河を走るボートが今でも通勤手段として利用されています。最近では「MuvMi（ムーブミー）」という電動のトゥクトゥクが登場し、スマートフォンのアプリから配車予約が可能です。地元の人々も日常的に使っており、私たち家族もよく利用していました。タイの暑さの中を風を浴びながら走る三輪タクシーは、まさに特別な体験でした。今ではその心地よさが懐かしく思い出されます。全体的に、バンコクの公共交通機関は日本よりも安価で利用しやすいと感じました。ただし、徒歩 10 分程度の移動であっても、炎天下のバンコクではかなり厳しいものがあります。そのため、多くの人が短距離でも交通機関を使うのかもしれません。

タイでもキャッシュレス決済の普及が急速に進んでいます。中でも最も一般的なのが、スマートフォンで QR コードを読み取って支払うデビット方式の決済サービスです。これは銀行口座と連携したもので、口座を持っていることが前提となります。私も現地で口座を開設し、このサービスを日常的に利用していました。街中での買い物はもちろん、EC サイトでのショッピングにも使えて非常に便利です。日本のようにポイント還元のような特典はありませんが、中間企業を介さないシンプルな銀行直結型の仕組みで、手数料なども一切かからないのが魅力です。この点では、日本のキャッシュレスサービスよりも素直で合理的だと感じました。

■おわりに

私は今回、初めて日本を離れて海外で生活する経験をしました。それも一人ではなく、妻と息子の三人での滞在でした。短期の海外出張とは異なり、家族全員分のビザの取得や、家族に適した住まい探しなど、多くの手続きが必要でした。大変なことも多くありましたが、それらを家族とともに乗り越えていく中で、これまで以上に家族の絆が深まったように感じています。

また、研究活動を通して出会った方々だけでなく、バンコクに駐在するビジネスパーソン、早期退職後に悠々自適な生活を送っている方、さらには世界銀行といった全く知らない組織で活躍されている方など、普段の日本での生活ではなかなか出会えない多様な背景を持つ人たちと知り合えたことも、大きな財産となりました。さらに、日本の外に住んでみることで、これまで当たり前だと思っていた日本の姿が、まったく違った視点から見えてきました。こうした体験は、私にとって非常に貴重なものとなりました。このような貴重な機会を与えてくださった東京理科大学の在外研究員制度に、心より感謝申し上げます。

渋滞する夕方の通勤時間